=市史編さん便り=　【第 19 号】 令和 3 年 7 月 12 日（月）発行.
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊土佐清水市教育委員会生涯学習課・市史編さん室

防意軒半開（ぼういけんはんかい）が見た近世末・中浜浦と大浜浦・・・

◆次の【資料】は、今から 162 年前の安政 5 年 3 月に高知城下から幡多郡下へ俳諧を楽しみながら、道々の風景や文化を見聞して巡遊した防意軒半開（本名土居正幾・元土佐藩士）が著わした『幡多郡紀行』の一部である。ちょうど、中浜浦を通過してその集落の様子を伝え、大浜浦の宿（庄屋沖信平の屋敷）を取り、主人（沖信平）と談話して一服するまでの行程を記した箇所を抜粋したものである。

なお、この原稿は、田村公利「俳人・防意軒半開の目から見た近世末以南の様相」（『土佐史談第 275 号』土佐史談会、2020 年 11 月 15 日発行、56―67 頁）を部分的に抜粋し、修正・加筆した内容である。

【資料】

尚小坂を越して中ノ浜に出つ、家居軒を並へ
中に川有りて橋を渡り　南の山上に寺有、
中にも富家と見ゆるは山城屋某、
町はづれに天神宮鎮坐舞台もありて美麗なり。
少し浜辺を過て小坂有。此の処も中ノ浜なり、
万次郎が親も存生の由。

坂を越して大浜に至る、日落て庄屋沖信平方に宿る。
主しの娘十歳斗なるに給仕する振舞いともかしこし。

月花に背丈伸ふ　身そ頼母しき　　半開

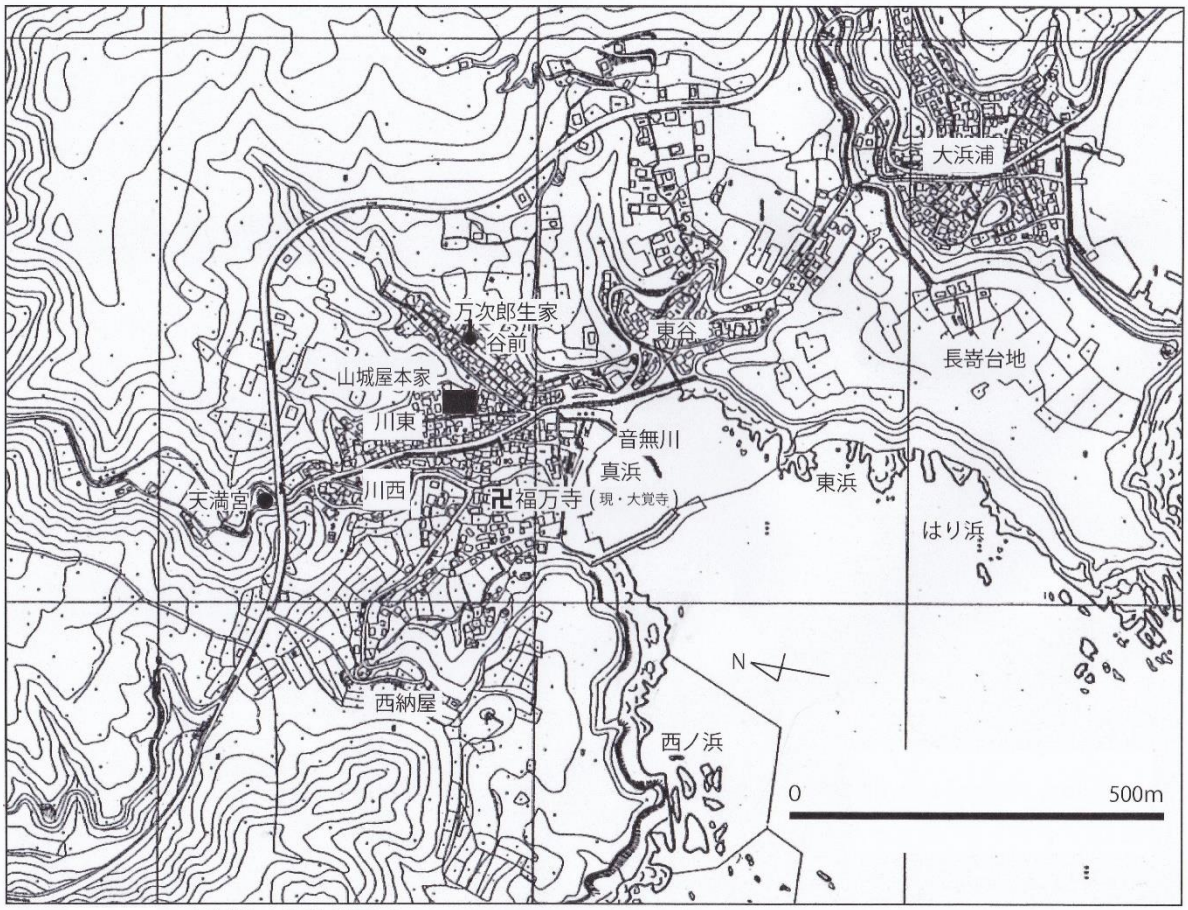
けふ道範四里半、坂七つ。
大浜と松尾の間より出たるをウス磐と云、此の塩、
八丈島迄塩込引通ひ船の往来難所にて毎度船の破損
ある所なりとそ、主るしの物語なり。

（防意軒半開『幡多郡紀行』より抜粋）

―【資料】解説―

【中浜浦のこと、山城屋のこと、万次郎に関わること】

◇中浜浦は、集落の音無川に沿って主要街路が南北に走る。集落谷筋奥に天満宮が鎮座し、右岸が「川西」、音無川左岸が「川東」、その南東側に「谷前」の谷筋がある。主要街路南東側に海岸段丘面「長嵜ダバ」、西側段丘上に福万寺が所在していた。この寺は、もともと音無川下流部周辺に所在（現在の区長場南側か？）していたが、



近世中浜浦図（土佐清水市まちづくり課作製 5000 分の 1 地形図に加筆）
※西川恵与市『土佐のかつお一本釣り』平凡社、1989 年を参照。

宝永 4 年（1707）地震津浪に本堂が流損し、正徳 4 年（1714）に段丘上の現在の位置に再建された。現在の大覚寺が所在する場所である。

◇明治初めの廃仏毀釈により、明治 5 年（1872）に福万寺は廃寺となり、明治 17 年（1884）に同じ場所で大覚寺として復活し、現在に至っている。明治 8 年（1875）に中濱東一郎が父・万次郎と共に中浜に帰省した。その際、東一郎は親類と当時廃寺になっていた福万寺境内にある共同墓地に上り、先祖への墓参りを行った。その時に東一郎は、父万次郎の空墓を見ている（万次郎の母は万次郎が操業中の海難事故で死亡したと思っていた）。現在、その空墓はなくなっている。

◇明治の終わりから大正の頃、山城屋一族は、川東・川西・西納屋の周辺に居住し、船を所有して節納屋を経営した。これに仕える漁師は、谷前・川東に集住していた。万次郎の生家も谷前に所在していた。また、酒屋・米屋・タバコ屋・呉服屋・雑貨商があった。このことから、おそらく、半開たちが通過した近世末の中浜浦もほとんどこれと変わらぬ集落景観だったと推測できる。近代は、近世の景観の残像が色濃く残り、生きていた時代であった。様々な近世の様相を近代の状況から読み取ることができる。

↑山城屋当主親子寄進の金剛福寺山門裏石灯篭(右:儀右衛門、左:武平の寄進)

◇半開らが紀行に記した山城屋は、前年に本家四代目武平（1814―57）が逝去し、その弟儀兵衛（1828―1903）が本家を支えていたころである。山城屋の全盛は、3 代目儀右衛門（父）（1789―1846）と 4 代目武平（子）の時代である。金剛福寺山門付裏に備後国尾道（広島県尾道市）から取り寄せた一対の花崗岩製の巨大な石灯籠がある。この石造物は山城屋の全盛を示す証拠（文化財）である。一時は従業員が 700 人を数え、浦を支配し、中浜浦を本拠とし、鼻前七浦を牛耳った。

　しかし、和船の時代が終わり、明治末から大正期にかけて動力船が導入されるようになり山城屋の繁栄に陰りが見えはじめた。地先でのカツオ漁からトカラ群島、五島列島、伊豆諸島、三陸沖へとカツオを追い、時季により漁場を転々とする遠洋漁業に変化したからである。半開らが中浜浦を通過したときは、まだ山城屋は全盛期であり、その威光が輝いていた時代であった。

◇半開が中浜～大浜を通過していた時代、中浜万次郎の母・志ヲもまだ健在であった。このとき志ヲはまだ 66 歳。彼女は明治 12 年（1879）に 87 歳で永眠。また、半開が幡多郡を俳句の旅をしていたころ、ちょうど万次郎は箱館奉行所与力次席として捕鯨指導に当たるため、函館に赴任していた（安政 5 年・1858）。半開が万次郎の母のことを知っているということは、当時、万次郎の体験記が多くの人々に周知されていたことを意味する。その波乱万丈の伝記は、現在に至るまで連綿と語り継がれている。

【大浜浦庄屋沖信平の屋敷に宿泊したときのエピソード】【八丈島まで漂流】

◇3 月 19 日の宿泊先は、大浜浦庄屋沖信平の屋敷であった。ここに 10 歳になる屋敷の愛娘が登場する。半開は、幼さを残しながらも彼女が、家の手伝いを背伸びしてけなげに振る舞い、宿泊者の世話をする様子を紀行文に記している。半開らが目を細め

て微笑ましく見ている場面が想像できる。地域の歴史景観ばかりではなく、旅を通じて交流した地域の人々の細やかな心遣いや人情を紀行に俳句を交えてよく織り込んでいる。

◇また、半開らは、この屋の主人からウス磐（臼碆）近辺の海域は黒潮が接岸し、潮流が速く、昔から船舶が破損しやすいことなどの話を聞いた。臼碆は大浜と松尾の中間に位置する岩礁でここからこの一帯を臼碆と土地の人は呼んだ。

主人の話は続く。延享 2 年（1745）12 月 26 日、紀州国出身の船頭伝六が窪津浦でクジラの骨糟を買い付け、これを清水浦に停泊するイサバ船まで運送するよう地元清水浦在住の廻船商人・藤五右衛門に依頼した。

◇彼は足摺半島を時計回りに廻船を回し、窪津➔津呂沖➔足摺岬➔松尾➔臼碆沖➔大浜➔中浜➔清水浦のコースで依頼された商品を運搬しようとそれを実行した。このとき、ウス磐（臼碆）沖合廻船が難破・漂流し、ついには八丈島まで流されてしまった。この詳細については、『土佐国群書類従』巻 78 所収の「八丈島漂渡記」（清水浦分一役・池則満が記述したと伝えられる）に記載されている。このとき乗船漂流したのは、藤右衛門ら 2 人と紀州人 2 人の計 4 人であった。八丈島に翌年 1 月 3 日に漂着し、結局、藤右衛門らが、江戸を経て、清水浦に帰着したのは 7 か月後の 8 月 30 日であった。このように足摺岬周辺の海域は潮流が速く、海路上極めて危険な海域であった。万次郎に限らず、このように漂流した人は多くいたと思われる。万次郎遭難の約 100 年前のことになる。

【編集後記】

▽先日、島根県立三瓶自然館研究員として赴任した今井悟編集委員に連絡する機会がありました。仕事にも次第に慣れ、少しずつ落ち着いてきているように、電話口の声から感じられます。業務の引き継ぎを少しずつ受けて慣れてきているようです。

委員の担当する「第 13 章の地質・地形」の原稿も今月中に提出できるところまで仕上がってきたようです。後は、文中に入れる説明図などが仕上がれば、原稿はほぼ完了するとのことでした。著作権申請も多くは必要ないようです。これまで引っ越しや新しい仕事のことなどで執筆状況を心配していましたが、ひと安心です。

▼一昨年逝去された前監修・前田和男先生が私を激励してくださったとき、そのハガキに書かれた言葉が強く印象に残っています。**「忙しいときほど、仕事は進む」**という言葉です。私たちは、ともすれば**忙しいことを理由に挙げて物事を先に延ばしがち**です。しかし、よくよく考えてみると、暇があるからといって仕事が進むものではありません。私などは暇があればあるほど、ダラダラとしてしまいます。

▽“Time is running”時間は走る。現在進行形です。待ってはくれません。貴重な時間を**原稿執筆と正面から向かい合い、現況を切り開いていただきたい**と思います。書けば次につながり、新たな展望が開けます。よろしくお願いいたします。（田村）